



福島県立梁川高等学校  
令和元年10月18日  
校長だより  
知性 誠実 責任  
第44号

## ■ 災害ボランティア

梁川地域における台風19号の被害は、33年前の8・5水害を超える甚大なものでした。本校生徒の約4割が通学に利用している阿武隈急行が運休となったこともあり、10月15日(火)は臨時休校となりました。幸い本校生徒で被害にあわれた家庭はありませんでした。本校の校舎も高台にあるため被害はありませんでした。しかし、学校のすぐ近くの地域では、大変な状況になっていました。阿武隈急行の運転が再開され、10月16日(水)は学校を再開し、全校生徒と教職員でボランティア活動を行い、翌10月17日(木)も続けました。

以下は、学校に戻ってきてから3年生が振り返りとして書いたものです。

○ 初めはあまりやる気がなかったけれど、作業をしていくうちにめんどくさいという気持ちはなくなり、ただ私の生まれた町を1日でも早く元の姿に戻したいと思い、みんなで協力して作業をしました。ボランティアをすると、周りの方々から感謝されるので、とても気分が良いと感じました。



○ ボランティアに参加してみて私は災害にあった人が多く、ゴミの山がとても驚きだった。自分の知っている町が台風の影響で変わり果ててとても驚いた。私が生きてきた中で、とても貴重な経験となった。

○ 地域の方とよく関わり被害にあわれた方を少しでも助けられたのならとても良いことをしたと思った。今回のような大きい水害は初めてだったが、次に同じような台風がくるときの対策を考えることもできると思った。町みんなが協力しいつもの町に戻ることを願いたい。

○ 作業は大変だったが、だれかの役に立ててよかった。ボランティアっていいですね。

○ 思い出の写真が水没してしまって、一枚一枚きれいにすることを私はさせていただいて、すごく悲しい気持ちになりました。

○ 2日間ボランティアに参加して被害が大きいということを改めて目の当たりにしたときショックでした。私のクラスは1日目、町裏にあるお家のお手伝いをしたのですが近所の方にやってほしいという依頼があり2軒やりました。力になれたことが嬉しかったです。とてもやりがいを感じました。町の人も優しく、頑張ってくれたなあと思いました。もう少しやりたいなとも思いました。

○ 2日間のボランティア活動で災害にあった人々の大変さやこういったボランティア活動で手伝ってくれる人たちのありがたみを身をもって実感しました。

○ 水が引いた後の梁川は泥水が多く、ごみは何カ所かに山になって結んであったりして思っていた以上に被害にあった人たちは大変だったんだなと実感しました。捨てる前に写真を撮っていた思い出の物を本当は捨てたくなかったらうなと見ていて思いました。お手伝いをした他の所もまだまだ片付けが終わっていませんが大変だと思いますが、少しでも早く元の梁川に戻れるといいなと思います。

○ 困ったときはお互い様という言葉は、こういうときに使うんだなと思いました。

○ やはり困っている人々の手助けができるのは非常に心地よかった。普段話す機会の少ない校長先生とも作業ができたのがとてもうれしかった。

○ 人が足りなくて、もし自分たちがボランティアに参加しなかったらどうなっていたのかな



と思いました。浸水のせいで子供たちが描いた絵もクレヨンも水浸しになってしまいとても悲しい気持ちになりました。

○ こども園の先生や保護者の方々に「ありがとう」と言ってもらえたことがとても嬉しかった。まだまだ大変な所もあるので最後までお手伝いできないのはとても心苦しかった。

## ■ 梁川地域青少年育成推進大会「少年の主張」

10月12日（土）に伊達市立梁川小学校講堂にて、「少年の主張」の発表がありました。梁川小学校から2名、堰本小学校1名、栗野小学校1名、梁川中学校1名、そして梁川高校から1名、計6名の発表がありました。

家族の思い

梁川高等学校 1年 齋藤紫音

平成15年、4月7日、私は生まれました。父から聞いていたのですが私は母親のおなかからなかなか出てこず、薬を使って無理やり陣痛を起こし、私は生まれました。私の名前は父と母で付けたようなものです。父が漢字を、母がふりがなを付けてくれました。父が言うには私の名前はゲームからとったらしく、紫音の紫と音という漢字には「強い男になれ」という意味があるらしいです。

私はあまり小さいときの記憶はありませんが、父から話は聞いています。私が2歳の時、父は今住んでいる家を造っている最中でした。父は建築の仕事をしています。その時の休憩中、私は父の道具を持ち出し、使ってはいけないところに使おうとしたり、家が完成し、受け渡しをした途端、外壁に落書きをしたり、よくいたずらをしていたそうです。そのたびに私は父に怒られ、泣いていました。子供でしたから、いたずらはしますよね。数年かけて家は完成しました。私たち家族のために家を造ってくれた父に感謝していますし、家を造ることができる父を尊敬しています。家族のためにという思いが詰まった家だということを今では感じられます。

あと覚えている幼いころの記憶といえば、私が5歳の時、預かり保育に入っていたことです。おもに祖母が迎えに来てくれましたが、たまに父が迎えに来てくれ、消防の集まりがある日にはよく連れて行ってくれました。そんなある日、曾祖母が急に亡くなりました。心不全だったようです。その時は人が亡くなるということに何の感情もありませんでした。今思うと、とても悲しい出来事でした。

私が小学校5年生の時、父と母は離婚しました。私や妹は悲しみました。しかし、この出来事があったからこそ家族の大切さやありがたみを強く感じることができました。現在は父が男手ひとつで家族を支えています。父は、いつも仕事で疲れています。学校生活のことなど相談に乗ってくれる頼れる父親です。母親とも1年に一度会い、話をする機会もあります。

家族の形は時とともに変化してゆきますが、家族への思いは変わらないと思います。今は父、私、妹、祖父、祖母の5人で生活しています。今まで私は家族に支えられ、助けられながらここまで来ました。今はまだ高校1年生ですが、これからは長男として家族をおもいやり、支えられるようになりたいです。普段妹の遊び相手に疲れてしまうときもありますが、妹の気持ちも考えながら接したいと思います。父と母が思いを託して付けてくれた名前に恥じないように生きていきたいと思っています。